

「児童・生徒の学力向上を図るための調査」結果を生かした授業改善について

1 学力調査等に基づいた自校の課題の分析

◆「全国学力・学習状況調査」による分析

正答率や無解答率、解答類型、四分位の割合、過去の調査結果等に着目

【国語】

○3二「文章に対する感想や意見を伝え合い、自分の文章のよいところを見付ける」は、全国・東京都の平均正答率をどちらも上回っているが、無解答率が20.8%と他の問題と比べても一番高く、東京都無解答率より3.4%、全国の無解答率より6.3%上回っている。また、他にも記述式の1四及び2二において無解答率が高いことから、

- ・設問に対する解答の書き方そのものが分からず、書かないで終わらせてしまう児童がいる。
- ・設問そのものの内容を読み取れず、問題に適した答えを出すことができない児童がいる。

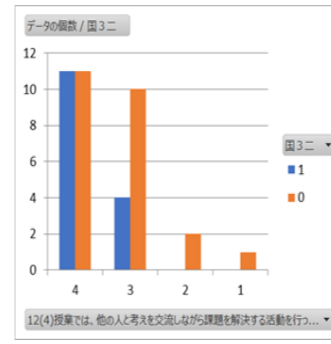
という課題があると分析した。そこでより読み解く力とそこから表現へつなげるための研究の必要性があると確認した。

◆「児童・生徒の学力向上を図るための調査」の効果的な分析方法の開発・実践（ア）

学習の進め方や指導方法に着目

「全国学力・学習状況調査」との相関関係を分析

無解答率が最も高かった3二において、12(4)「授業では、他の人と考えを交流しながら課題を解決する活動を行っていると思う。」に肯定的に回答した児童の方が正答している割合は高かった。思いや考えを共有し合える場の設定をすることが無解答を減らすことにつながるのではないかと分析した。



児童・生徒の学び方等を分析

- ・12(2)「授業では、前の時間までに学習した内容と結び付けて考える時間があると思う。」に肯定的に回答した児童は、否定的に回答した児童に比べて国語科の正答率が高いことを確認した。また、4(13)「学習していて分からない言葉があれば、すぐ調べるようにしている。」と1(1)「国語の授業の内容はどれくらい分かりますか。」の回答については、0.39というやや高め的相关関係を確認した。しかし、本調査において、1(1)の設問に対しては、肯定的回答が半分以下の学年もあり、学年や発達段階による違いも確認した。
- ・そこで、辞書引き活動が続けることが国語科の理解力の向上につながり、正答率を上げていくことにつながっていくのではないかと分析した。

2 課題の解決に向けた手だての明確化

学校全体で重点化や焦点化する内容を決定

◆解決すべき課題の明確化

- 学習の課題
 - ・設問に対する解答の書き方そのものがわからず、書かないで終わらせてしまう。
- 学習方法の課題
 - ・学習の進め方が分からず、見通しをもつことができていない。
 - ・自分一人では思いや考えに自信がもてず、他者との共有・交流する場が必要である。
- 指導方法の課題
 - ・クラスの全児童が、45分間集中して授業に取り組めるような指導力向上が必要である。

◆課題の解決に向けた手だての決定

- 国語科において、児童全員が45分間集中して取り組むことができる授業づくりを目指す「戸山スタンダード」を確立する。
- <例>
- ・単元計画をもとに、毎時間のめあて・目標を明確に示し、全児童が見通しをもって学習に取り組めるようにする。また、授業の終末にはそれが達成できたか自己評価を行う。
 - ・友達との意見の共有、交流する場として話し合い活動を取り入れる。
 - ・語彙を獲得するための辞書引き学習や読書活動の充実を図る。

3 手だての実践と検証

◆授業改善の実現に向けた組織的なOJT推進の実践事例の開発（イ）

〈検証授業の実施〉

課題の解決に向けた手だてのうち、授業改善として取り組むべき課題を授業の中で実践し、成果と課題を明確にする。

☆「戸山スタンダード」を基に計画を立てて授業を行った。

- ・今年度は校内研究として1年生と6年生で研究授業を実施した。

<成果>

- ・学習計画が明確になっていることで、児童が見通しをもって授業に参加することができた。
- ・グループ学習を通して、友達の考えを取り入れながら文学作品を読み、語彙を増やすことにつながった。

<課題>

- ・学齢に応じた情報の内容や容量を精選する。
- ・話し合い活動のねらいを明確にする必要がある。

〈検証授業の成果と課題を踏まえた組織的な授業改善OJTの実施〉

- 【組織】
- 授業改善や授業方法の開発、実践に取り組めるよう主幹教諭・主任教諭を中心としたOJTグループ
- 1・3・5年生分科会
 - 2・4・6年生分科会

◆効果的な家庭学習の指導事例の開発（ウ）

児童は、一人1台端末を活用し、一人一人の進捗状況に応じた家庭学習に取り組んでいる。デジタルドリルを中心に行っているが、今後さらに「ことばの習得」を意識した家庭学習を行っていくために、特別支援教育の手法を取り入れながら研究開発を続けていく。

◆児童・生徒一人一人の学びに向かう力等を育む指導方法の開発・実践（エ）

読書活動では、読んだ本の冊数やページ数を記録すること、辞書引き学習では、新しく知った言葉に付箋を貼っていくことで「児童の取組の視覚化の徹底」が図られ、児童の学習意欲につながっている。次年度は獲得した語彙を表現活動につなげるためにICT機器と対面授業のよさの両面を生かした研究を推進していく。